

現代の商道德の基礎を築いた商業界前主幹・倉本長治によって「店は客のためにある」と説かれた第二次大戦後を中心とした 20 世紀がもう少して終わろうとしている。

この名言が生まれた背景として終戦直後の商いは暴利をむさぼる者が商売上手であるかのような錯覚が罷り通っていた。

要するに商道德というものが無視されるような経済環境であったのである。

そこで倉本長治が全国を行脚し、「店は客によるこんでもらう場であって、単なる金儲けの場であってはいけない。その店でお客を通じて自分を切磋琢磨することが大切である。」と説いて廻られた。

要するにお客様をよろこばす為にはどんな店にしなければならないのかを徹底して考えていくと、お客様がよろこんでくれる瞬間を自分自身が数多く体感する為にあれこれと思索することになる。

戦後と比較して商道德が正しく受け入れられ、実践されるようになった今日、「店は客のためにある」のことばの真意として「店という修行の場で『お客様を通じて自分を育てる。』」ということは今一度、肝に銘じなければならない。

そしてその行動の先にはお客様のよろこびが自分のよろこびとイコールになってくるのである。

仏教に「利他」の精神がある。

「利己」に対して、「利他」があるわけだが自分の利を求めず、他人の利を考えることの大切さを説いている。

これも 20 世紀の経営を省みるヒントになる。

しかし、やはり大切なのは、「利他」と「利己」がイコールになることが究極の目的でなければならないと思う。

これこそが 21 世紀の商いの原点であり、ここに新しい商い、新しい人間社会を形成する重要なヒントがあると思うのである。

利益の追求のみに頭を悩ますより、「足る」を知ればそこに集う従業員の生活は自然と成り立つようにできているはずである。

自然とはそういうものだと思う。

21 世紀は余分な利益を追い求めるような行動は永くつづかない。

自然の摂理に反するようなエネルギーは必ず 21 世紀の波動からはじき出されるであろう。

21 世紀を流れる自然波動に同調できなければ企業経営だけでなく人間（生命体）として生きていくことが難しくなると思う。

日本人は金を儲ける為の勉強には労をおしまない。

しかし、もうそろそろ 21 世紀を目前にして我々は人をよろこばす為にどのように金を使ったらいいのか、金の正しい使い方を学ばなければならないと思う。

自分の為に多くの金を蓄えて死んだ人よりも、多くの金を使って他人をよろこばせて死んだ人の方が永く名が残るのはなぜなのか。

他人を笑わせることが大好きだった、チャップリンは他人の「笑い」、「よろこび」イコール自分の「よろこび」「幸せ」であったと思う。

だからチャップリンは永く名が残っているのではないだろうか。

20 世紀型思考のスタイルは、

他人をよろこばす→金が儲かる→自分がよろこべる

であった。しかし、21 世紀は、

他人をよろこばす = 自分がよろこべる

└ 必要なだけの生活の糧が残る

といった思考スタイルを究極の目的としなければならないと思う。

要するに目的に向けて起こす行動とゴールが常に一対となれば、結果として、人間らしくそして自然の構成要素のひとつとしての生命体として天寿をまっとうできるはずなのである。

他人のよろこびを、まず金の量によって計ろうとすることを当然とした 20 世紀の自分を改めたいと思う。

有名な「ウサギとカメ」の童話の中で、なぜウサギはカメに負けたのか、油断したからだけではない。

ウサギはカメばかりを意識して山の頂上のゴールを究極の目的として意識していなかった。しかしカメはウサギを全く意識せず、常に山の頂上を目指していた。

カメのそのゆっくりとした小さな一歩を踏み出すことが目的達成への歩みとなっていたのである。

金を儲けることや、ライバルに勝つことを人生の目的とするのはあまりにさびしい生き方とはいえないだろうか。

金儲けをしながら他人を正しくよろこばす為には常に倫理に照らし合わせて金儲けの方法を考えなければならない。

しかし、倫理は時代や環境によって変えられるものであるから万能とはいえない。

要するにその時代と自然環境を背景とした人間社会の多数決によって倫理が決定されてしまう。

その倫理を保つ為に法律といったルールができ、そのルールの元で、効率よく金を儲ける為にテクニックやマニュアルが生まれてくる。

基本と共にこれらのプロセスを学ばないでテクニックやマニュアルだけを重視してきたから結果として「20世紀の常識が21世紀には通用しそうにない」、とすべての人が不安に感じはじめているのである。

不安感だけが先行して「大変だ」ということばを挨拶代わりに唱えているだけでは21世紀を希望の100年にすることはできない。

20世紀の終焉の今、21世紀を幸せに生きる為に自分自身の真の目的を意識し、そしてその実現に向けて行動を起こすことを忘れてはならないと思うのである。

合掌